

可能となり、乗客全員高台にある屋敷に避難。眠られぬ一夜を過ごし翌朝駅に行つて見ると、列車は見事に転覆、開通の目途も立たず前途多難。結局八時間かけて宮古まで歩き、釜石行きを諦め、漁船を頼み海路八戸經由盛岡へ。

その後、盛岡管理部出納係を発令され、五十六年四月一日定年退職まで、盛岡鉄道管理局にお世話になった。

復職間もなく東京旧丸の内ビルに進駐軍に呼び出され、二泊三日で抑留中の実情を聞かれ、実際に労働してきた自分よりも細部にわたり調査済みの情報網には驚かされましたが……。

私自身、抑留中の鉾山労働が祟り胸の難病にかかり、病院に入退院を繰り返していましたが、命永らえて現在に至っております。若くして散った戦友その他の皆様の御冥福を祈ります。

暗黒の思い出

熊本県 白井鉄郎

今年も暑い夏がやってきた。思い出すまいと思つても、消すことのできない暗い思い出。戦後五十年の節目とか。それにつけても終戦の日が近づくとまず原爆被災者のこと、次いで中国戦線、南方戦線の戦死者のことがマスコミに取り上げられてくるが、北方戦線で終戦後ソ連に抑留され、酷寒の地に過酷な労働と飢えのため、母国に帰ることなく万斛の涙をのんで凍土に埋められた六万と言われる人々のことは、あまり語られることがないのはなぜなのか？

七月の初め、旧制中学の同級生であり、後にわかつたが、同じ部隊に所属した戦友でもあった熊本県連会長高瀬潤吉氏より電話があり、シベリアの抑留記を書いてみないかと言われ、忘れようと努力してきた暗い過去が改めて思い返され、亡き戦友のためにも、今は

記憶も薄れた嫌な思い出の記憶をたどりつつ、つたない筆を執った次第で、以下書き述べることは、日時、場所等には若干の食い違いもあるかと思うが、その場の経験は事実であり、思い出したくない抑留の真実である。

私は、昭和十二年三月、熊本県下益城郡松橋小学校卒。同年四月、県立宇土中学校入学。昭和十四年四月、福岡県立三池中学校転入。十七年三月、卒業。昭和十八年四月、東洋語学専門学校露語科入学。二十年九月十五日（繰上卒）、当時抑留中。

家業は、父が昭和五年、独立建国前の満州国際運輸に転職。終戦時は新京で軍装品会社経営。引き揚げ後、事業に再三失敗。その後、熊本県庁職員として勤務。

家族構成は、両親（父、昭四三・八・三、母、昭四六・七・二二死去）、兄は第一次学徒兵として中支戦線で小隊長として勤務。復員後、県庁職員となり定年まで勤務（平成三・一二死亡）。（末弟も兄より三日前死亡）。小生は次男で、下に三、四男あり。健在。

昭和十九年十月十五日、西部一六部隊に入隊、即日

夜中に出発、満州一八部隊要員として出発。装備は軍服に巻脚絆、地下足袋、丸腰でハイラルに着いたときには一八部隊は既に南方戦線に出動、急遽、国境守備満州第三六二部隊要員となる。大隊砲小隊に編入され、翌日より早速演習開始、初年兵として厳しい訓練が始まった。初年兵の訓練は多く紹介されているので略するが、親のありがたさを痛切に感じた。翌年三月ごろより大隊砲が入隊時四門あったが一門となり、陣地より実弾が内地防衛名目で連日運び出されていった。私は幹部候補生となり、特訓を受けたが、これはまた特に厳しいものであった。一般の兵隊は箱爆雷を胸に抱え、戦車に向かって飛び込む肉迫攻撃訓練が盛んに行われていた。

六月ごろになると、全満州の後備役要員が召集されて入隊してきた。寝台に寝ている頭を眺めると、髪の毛も薄くなった人々もいたが、入ソ後、主にこの高年齢の方々が早く亡くなっている。

さらに七月後半になると、朝鮮人の現役兵が幾人か入隊してきた。連隊の主力は大興安嶺の陣地構築にあ

り、留守隊は千人足らずで、主力は前記の兵である。

昭和二十年八月九日午前二時ごろ、部隊で非常呼集、留守隊全員営庭に集合。留守隊先任將校より「本日本明ソ連参戦、満州の主要国境戦を越えて侵攻中である。留守隊は装備を整え、本日夕刻出発、大興安嶺の本隊に合流する。直ちに準備にかかれ」との命令あり。

夜明けとともにソ連機来襲、ハイラル地区ほとんど全域にわたり爆撃、主要な軍事施設はほとんど攻撃を受け、煙と炎に包まれていた。東山陣地の兵舎は直接の爆撃はなかったが、地鳴りと揺れで腹にずんとこたえる。直ちに宿舎に帰り、軍装品の支給、糧秣、弾薬の準備等で追われ、営庭には各隊より選抜された兵たちにより、タコ壺掘りが急がれていた（しかし、利用されなかった）。今まで継ぎだらけの軍服でボロ靴でいたのに、兵器庫、被服庫、糧秣庫にはびっくりするほどの物資が山積みされている。兵器は主に小銃、若干の機関銃であり、我が隊は速射砲、連隊砲各一門、これをもとに砲中隊を編制、出発時より大興安嶺まで、ソ連戦車に備え最後尾となる。

夕刻六時過ぎ、全員営庭に集合、そのうち百二十名ほどが別に編制され、機関銃とともに、ハイラル主要陣地守備隊員として派遣されることとなり、訣別。爆撃下のハイラル市街を陣地に向けて出発していった。その後の消息は不明。

臨時編制でにわかづくりの小中隊が出来上がり、夕刻八時過ぎ部隊出発、大興安嶺へと向かう。「常に後方よりソ連戦車が追尾してきている、急げ」と言われ、行軍は食事の間も惜しみ夜昼通しての急行軍であり、もちろん夜眠ることも許されない。総勢、出発時には八百名くらいだったと思うが、途中で野戦糧秣廠、被服廠、病馬廠等々各部隊の派遣要員より同行申し入れがあり、気がつくと千三百人くらいになっていた。開拓団の子供連れの親子を輜重車に乗せて興安北省牙克石^{ガク}まで送り降ろしたが、情報では汽車が出るとのことだったが、不明である。

牙克石で突然前方より伝令がやってきた。「砲中隊は戦闘配備につけ」とのこと。三門の砲を据え、戦闘配備につくとともに砲撃姿勢をとり、速射砲の榴縄を

引いたとき、弾丸が飛び出した。一昼夜にわたり、引張つてきた砲の中に実弾を詰めたままであったことが実証され、いかに慌ててハイラルを出たかが証明された。また、敵戦車現れるということで、千メートルほど後方に戻り、眼鏡で眺めると、戦車が二十車両ほど見える。よく見ると、旗が振られている。日の丸の旗であり、日本軍の軽戦車である。直ちに馬首を返し本隊に戻り、その旨報告、再び行軍開始、大興安嶺に向かう。

四日目の夜明け、日本軍の部隊に遭遇、大興安嶺より下がって来る。肩章をつけた方面軍の参謀、三角旗をつけた軍用車等に行き会い、第一線に向かう部隊かと大いに振るい立ったものである。後日知ったことだが、前線とは百八十度違う後方に向かつて後退していたのである。やっと本隊に到着、留守部隊はそれぞれの中隊に帰属、私も所属隊に行き、到着した旨隊長に申告、そのまま前後不覚の眠りについた。翌日昼前、ひもじさと渴きを覚え目を覚ますと、周囲にはだれもおらず、通路の向かい側に一斗樽二個と薬缶が一つ置

かれていた。やがて話し声が聞こえK伍長と兵三名がやってきた。

「迎えにまいりました。本今朝、陣地移動しました。あまりよく眠っていたのでそのまま移動し、甘めん品受領を兼ねて迎えにきました。ただいまから案内します」と言う。同道し中隊本部に行き、改めてもの所属小隊をもとに一大隊の残留兵を合流し、中隊編制がなされ、私は第四小隊付きとなった。掩体壕の中で数日、前方に股々と聞こえる砲声を聞きながら、今にも来るであろう戦車を待ちつつ対峙している心境は、心臓が頭にあるようで、頭がガンガン、恐怖心はなく全体が放心飽和状態で疲労も空腹も感じられない。ただ前方を見据え、軍刀を立て握りしめているばかりだった。

終戦の詔勅は聞いていないが、関東軍本部より軍使が来て、八月十五日、日本国は連合国に対し全面降伏した旨、中隊本部に伝令が来た模様で、各隊は博克図ボク図の戦闘指揮所に集合すべしとのことで、日時は記憶しないが、各小隊ごとに身の回り品を持ち、武器は小銃

携行、他の武器弾薬は陣地に放置したまま、ごく軽装で山を下る。もちろん食糧も当座分だけ携帯し、急行車で博克凶に向かった。

戦闘指揮所に着くと、広場の中は丸腰になって疲れ果て、うつろな目をした日本兵が地面に座っている。

中央には、小銃と帯剣の山ができています。我々も整列させられ、兵器はすべて前に出させられた。そのとき「指揮者は隊列の先頭に出ること」と通達があり、ソ連のニュースカメラマンが撮影していく。顔を伏せていると「顔を上げ」と言われ、カメラの後から機関銃が迫ってくる。降伏の惨めさをしみじみと感じさせられた。ソ連人、中国人、朝鮮人の通訳が、時計、万年筆、煙草ケースなどを出せと言ひ、腕をさぐり、ポケットをあさり、見つけ次第取り上げていく。その後、満鉄職員宿舎に分散收容される。一部屋に五、六十名である。手足を伸ばすこともままならない。

今後のことは全然わからない。放心状態の数日が過ぎる。携帯した食糧もだんだんと底をつき出し、既に一人の死者が出た。恐らく飢えと栄養失調、それに精

神疲労であろう若者である。

柵の外を眺めると、ソ連兵が酒保で出していた「勝鬨羊羹」を手で握り、においをかぎ、投げ捨て、足で蹴っている。ダイナマイトとでも思っているのか？ 数日後、宿舍全員收容がえとなり、戦闘指揮所の建物に移動となり、私も一大隊残留者とともに移動、一部屋に入る。ほとんどの者が馴染みのない仲間である。中には第二国民兵役の補充兵も混じっている。考えてみれば、私の父に近い年齢である。

ここではつきりしておくが、武装解除後の我々に対するソ連の取り扱いは、将校集団と下士官と兵の集団に分けたことで、見習士官はその服装から下士官扱いとなった。下士官、兵、それぞれの部屋に分かれたが、私たちは部外者扱いで、残りは昔からの仲間が集まっている。時々目にしたことだが、初年兵や、年次の浅い兵隊が、理由もなく古年兵や下士官より殴られているのを目撃した。この先どうなるのか、食糧はもちろん、生命の保証もない。ただただ無意味な毎日を過ごすのみで、衣服、下着にはシラミが行列している。精

神的にも極限状態でのいらいらがそうさせるのか？やられる者こそ哀れである。そのことを見聞きしても、何もできない私が情けなかった。

ソ連軍が侵入して一番に始めたことは、満鉄線路のゲージを広げることだった。次に駅周辺には関東軍の糧秣、被服の没収物がある。押収物資の山が幾つもあった。満人の様子は、どこに隠していたのか、青天白日旗を掲げ、小銃を持った自警団ができていた。隣接した鉄柵の中には満鉄職員が収容されていたが、中坊主頭にした女子も数人混じっていたが、その後のことは不明。

九月も過ぎて十月に入ると、朝晩の冷え込みもきつくと、軍の編制もばらばらとなり、順次貨車に詰め込まれて移動が始まり、私たちも満鉄の機関車に収容がえとなる。このころになると、夜は寒くて眠ることなど無理で、燃料と言えば、倉庫内に山積みされたグリーン缶をあけて、燃やして暖を取ることしかできない。顔は油煙で真っ黒である。申すまでもなく服装は夏の軍装であるから、若干の毛布とラシヤの外套が全員に

は行き渡らない。大興安嶺のふもとである夜昼の寒暖の差は想像に絶する。それにひもじさである。その間、幾度かソ連の使役があつたが、常に仕事をするのは兵隊で、古年次兵や下士官は見ているだけである。私たちも二、三度使役に出たが、被服整理のときは、作業中に衣服の交換、糧秣整理のときは、ソ連兵の目をおすめて手当たり次第ポケットやバンドを緩めてズボンの中へ詰め込んで帰った。私たちの小隊では、飢えた者や死亡者を出さずに済んだのは幸いだった。

十月二十日過ぎ、広場に出され五十人一個小隊とし、千五百名編制で、満鉄は一般引揚者で満杯なのでシベリア經由帰国するというところで、博克図駅より乗車、貨車であっても日本に帰れるということで、何も苦にならない。動き出して、翌朝滿州里に着く。しばらく停車、荷物の積み込みなどの労力提供要求があつた。その合同をついて、時計、万年筆、皮バンド等の強制取り上げがあつた。

夕刻、再び出発、何も見えない貨車の中でひたすら故国日本への夢を見る。不安であつても不安を打ち消

しながら、無理にも日本への夢と希望を追う車中である。暗い車中、何も見えない貨車の中、大小便もままならぬ車中、汽車は北へ北へと進んでいく。仲間の何人かが、ナイフで板と板の間に穴をあけ、小さな光を車中へ、小さな穴から外の風景を見る者がいる。うっすらと雪化粧した台地と白樺の林が遠目に見える。人家はほとんど見えない!!何といつても寒い。体を寄せ合って暖を取ろうとしても、何の効果もなかった。ただひたすら寒い、そして不安、どこに行くのか?何もわからない。やけくそになる気力も出てこない。暗い車中に幾日過ごしたろうか、カリムスコエ駅に着いた。シベリア鉄道の分岐点である。果たして汽車は西か東か、東に向かえば日本へ、西に向かえば希望は零。動き出した汽車は西へ。淡い希望も消え、ただただ落胆と不安のみが支配する。これから先どうなるのか、だれにもわからない。絶望と空しさ!!ノバヤに到着、全員下車、隊伍を組んで徒步行軍、行き先も知らされずひたすら黙々と歩く。ソ連兵の銃と怒声に追われつつ。

覚悟したとはいえ何ともやるせなく、空しく悲しい行軍である。途中、野営、草原の中である。周囲は薄く雪化粧、寒い!!早速、大焚き火、火に向いている方は暖かみがあるが、背中は北極、一晩じゅう向きをかえて暖を取り、夜明けとともに行軍開始、皆、無言で歩く。河岸に至り川をつなぐワイヤをたぐりつつ対岸に渡り、ジンプルカで五百名が河岸の收容所に收容された。

残り千名はさらに行軍を続け、山の方へと進み、日没近くナリム收容所へ到着。今で言うログハウスの中に收容された。少ない食糧、防寒被服を持たない寒さ、板張りの寝台、部屋の中の暖炉だけが救いである。その翌日から作業開始、ソ連兵の銃口に追われ、床尾板でたたかれ、松の木の伐採と運搬、收容所の周囲の穴掘りである。穴は深さ一メートル五十センチ程度だが、あと三センチが難しい。上は砂地で簡単だが、下は凍土である。スコップではまことに力の要る仕事で、つらい作業だった。

その穴に松の木を並べ、五メートルほどの高さの囲

いをつくっていくのであるが、何のことはない、自分たちを囲い込む木の塀であり、四隅には見張台までつくられたのである。時にナリム到着は十月の二十七日と記憶している。十一月に入ると、初めは二、三人、そのうち十人前後の隊員が毎日のように死んでいく。二十一年の四月ごろまで、実に四百三十人近くの隊員があゝの世に去っていった。わずか半年足らずの間である。

収容所内における宿舎は、将校と下士官、兵は別棟である。毎朝六時、全員宿舎前に整列し、東方遙拝、五カ条を唱え、将校が交代で訓話をする「日本は降伏したが、我々軍人は健在である。軍人精神を忘れてはならん」。みんなの耳にも、言う本人も空々しく聞かされたであろうと思う。その後、慌ただしく朝食。朝食といつても、乾燥ワカメの塩汁と馬糧高粱の粥である。それも腹五分というところで昼までとても持つ代物ではない。空腹と寒さ、精神的苦痛と肉体的疲労、何と表現したらよいものか、文字で表現することは不可能である。

その中でも階級、年次の差は依然として残っており、ブツケどころのない鬱憤は年次の浅い兵に向けられ、毎晩のように制裁が行われた。作業では一番酷使され、糧秣は減らされた兵が何と言っても最大の被害者であったことはまぎれもない事実である。他の収容所の記録では主な加害者はソ連兵となっているが、私たちの収容所では、ソ連の酷使もあるが、前述のごとく軍隊の上下関係の存続が最も犠牲者を生んだ大きな原因であることは否めない。

やがて冬の被服が支給された。上衣は満服の綿入れである。靴も防寒靴、防寒靴下はなく手拭大のネルが二枚、これを足に巻いて靴下の代用にするのである。防寒外套も支給されたが、関東軍の押収品で、まともな物はなく、もちろん程度のよいものから、将校、下士官、兵へと渡っていく。当時としては、当然の成り行きかもしれないが？今考えると慚愧ざんきに堪えない。

しかし、現実には情実に浸っておれるような生やさしいものではない。俗に言う自分の尻に火のついた状態である。万事が人に情けをかければ自分が参るとい

状況の中で、いかに自分が生きるか、平和な日本に生存する現在では考えられない現実であった。衣類にわくシラミは手首、首筋まではい出す始末で、やせてあばら骨の浮き出た窪みに行列しているシラミ、月一回のシャワーの日、蒸しぶろの段々に座っている仲間みんなが目にし、体験したことである。蒸しぶろの中で、そのままあの世に旅立った者も何人かいた。そのうち、シラミによる発疹チフスが蔓延し出し、発熱と下痢症状を併発し、次々に亡くなっていく。月一回素っ裸で尻の肉をつまむ身体検査で、次々病棟に収容された。私の隊でも動ける者は十二、三名ほどとなり、入院した者のうち、七人が死亡した。

病棟とはいえ、医師や看護婦は皆無、看護する者もなく、比較的体の動ける者が食事の配分くらいを介助していたに過ぎない。

薬もなし、体力の劣った者から命を断って逝ったのである。命を失わず生き延びることのできた者は、みずからの生命力を持った者で、体力のある者即ち若い力である。亡くなった人たちはほとんど四十歳前後の

人である。作業終了後、または休日に病棟を再三訪ね、人の死に立ち会ったが、独身者は母を、妻帯者は妻の名を呼び、子供のことを頼むと言う。不思議なことに父親を呼んだ者は皆無であった。大きな呼吸を一つし、静かになる。この一瞬が現世との別れである。遺体は衣服をはがされ裸にされて、真っ白な雪の上に寝かされる。翌朝、軽作業に従事する者たちの手で埋葬されるのである。

松の木の棒二本に荒縄を渡して編んだ担架に乗せて遺体を運ぶ。遺体を並べ近くにまず焚き火をし、一時間ほど燃やしてその跡を掘るのである。これを繰り返しながら一日で六十センチ程度の深さで縦三メートル、横二メートルの長方形の穴に六人並べ、次に足を交差するように重ね、その上に土をかぶせ、雪を高く盛り上げ、松の原木の両面を削り、消し炭で死亡年月日、氏名を記入して埋葬終了である。素っ裸で埋められ、さぞ寒かったであろう。残された衣類や、毛布等はドラム缶で煮沸され、再び支給されるのである。

収容所の周辺に数軒のロシア人家屋が点在していた

が、窓に「億兆一心」の染め抜かれた和手拭いが下がり、日本ほうきが下がっているのが散見できた。ソ連は兵器は十分だが、一般の人は生活用品が極端に不足していたようだ。

昭和二十一年の正月を迎えても、今までどおり毎日ソ連兵の銃口に追われ、伐採、伐木の運搬作業が続けられていた。比較的元気な者は皆労働を強制され、歩行中小さな木の枝一つまたぐのが苦しかった。毎日死者が出る。いかに神や仏に願っても頼んでも、環境は変わらない。このような状況の下、ただひたすら、ここで参つてたまるか!!日本の土を一步でも踏んで死ぬぞ!!の合言葉で励まし合い、心の支えとした。

この年、三月末、百五十人くらいと思うが、ジンプルカ收容所に移された。前住者とあわせて三百人くらいになったと思う。收容所の前は川で、幅は五十メートルくらいか、まだ完全に凍っている。作業は伐採、伐木の運搬、車の積み込みで、山で切られた材木は川岸に積み上げられる。このころ、将校団は別の收容所へと分離されていた。五月に入ると、チタの民主学校

を終えたといわれる人物が三人ほどジンプルカにやって来て、全員集会を開き、まず收容所内での本部と称し、ソ連側と食糧、作業人員の配分などを行っていた者たちを糾弾し、日本国の政治経済、軍国主義等について特に厳しく批判、共産党の偉大さ、階級制度の誤り等につき、ソ連の收容所長を背後に熱心に呼びかけた。聞いている者たちの中に呼応する者、涙を流し、手を振り上げ足踏みして賛同の意をあらわす者が続出した。

シベリア抑留者民主化運動の始まりである。たちまちチタ帰りと言われる者たちが本部に入り、委員長、副委員長、書記となり、民主化運動が始まり、同時にモスクワの日本語出版で出された「ボルシヴィキ党史」「マルクス、エンゲルスの経済論、唯物論」等の図書、冊子が配布された。活字に飢えていた我々は貪るように読み、感動する者、理解できない者さまざまである。私も読んだが、今までの教育を受けた中では禁じられていた理論であり、まことに新鮮で複雑な心境であった。そのうち「日本新聞」が配布されるよう

になり、たばこの巻紙として大変重宝した。

このころ忘れることができない嫌な悲しい事件が発生した。四月半ばと思うが、山の作業を終え、收容所前に整列し人員点呼を受けているとき、一人の兵隊がフラフラと雪の原野に歩き出した。ソ連兵が「ストーイ（とまれ）」「ダモイ（帰れ）」と連呼したが、振り向きもせず真つ直ぐ歩いていく。並んでいた我々も茫然として見ていた。

やがてソ連兵が銃を構え「ダモイ」と連呼するが歩みをとめない。ついに引金が引かれ、瞬間、飛び上がるようにして前のめりに倒れた。距離にして二百メートルくらいか、みな自分の目を疑うような現実であった。

射殺された遺体は、その後四、五日、收容所門横に放置されていた。

五月の終わりがらになると、川の氷が割れ出してくる。表面が盛り上がり、突然大音響とともに割れる。厚さ一メートル三、四十センチの厚味がある氷が折り重なるようにして次々と割れるさまは、音とともに壮

観である。一週間ほどこのような状態が続き、やがて川に水の流れが戻ってくると、流れに乗って無数の魚が流れてくる。川底の魚が泳ぎ出すころ、流木作業が始まった。川岸に積んだ木材を川に落とし込むと、数十メートル流れて流木は引つかかり、山のように積み重なる。

すると流木の後ろに臨時のダムのような状況ができる。そこで三、四メートルの棒の先に鉄の鉤をつけた鋸こぎりで先端の材木を七、八人がかりで一本、また一本と抜いて流していくうちに、材木の山がドット動き出す言葉で言えば簡単に聞こえるが、すごく危険な作業である。死人は出なかったが、相当な怪我人が毎日のように出ていた。このような作業の繰り返しで、数十日かけてはるか下流まで流していくのである。

山での作業は相変わらず続けられている。六月過ぎるころ、食事は三段階に区別して支給されるようになった。「働かざる者食うべからず」を地でいくのである。また、「民主化運動はますます盛んになり、「勤労者の祖国ソ同盟のために」と称して、襟に赤い布切

れをつけた突撃隊が編制され、みんなの先頭に立って作業に頑張り出した。もちろん食事もおてんこ盛りである。

夜になるとボルシヴィキ党史の講義も始まった。そのころ、隊員一人一人の出身を洗い出し、階級闘争と称し、吊るし上げが始まった。

まず作業ノルマに達しない者は勤労意欲がなく、勤労者の敵である。また、私のような学徒兵はプチブルである。プチブルはブルジョアを指し、その協力者である。したがって反動である。

まことに単純明快な論理で、当分の間、毎晩集団の真ん中に座らされ、(五、六人くらい)周りの連中がいろいろと問いかけてくる。答えると答えが反動であると叫ぶ。それに呼応して、罵声が飛ぶ。何と言っても聞き入れられることなく、周りを労働歌や革命歌を歌いながら「ワツシヨイ、ワツシヨイ」、合間に大声で「お前たちは反動である」と一段と声高く叫び、足踏みならし、ヤジが飛ぶ!!さすがに私も精神、体力ともに消耗し、尾籠な話だが、便所 دعاがむと自分の肛

門が見えるようになった。

作業の合間に話すことは食べる話が主で、一升飯は一度に食べるか、一升餅はどうかとか、たわいのない話題で、間違っても色気話は皆無であった。七月に入ったころ、第二回目の民主学校の修了者が三名ほどやってきた。各作業現場に常に顔を出し、いろいろと話しかけてくる。休憩時、特に私の側にやってきた。なぜあなたはノルマが上がらないのか、軍国時代をどう思うか、天皇制をどう思うか、夜の学習会はどうかとか、妙になれなれしく話しかけてきたが、無視していた。

二十一年末、数回査問会に引き出され、日本人のアクチーブに責められるのは何としても解せぬことで、「この収容所内がソ連における日本ではないか、なぜ日本人同士争うのか」と言い返すと、「あなたはいまだ天皇制に対する認識ができていない、これ以上我々に協力しなければ、強制収容所に送るぞ」と恫喝された。三度ほど繰り返して査問会に呼ばれ、自己批判するよう強制されたが、自己批判することはないと突っぱ

ねた。そのかわり、作業のノルマを上げるよう努力することにした。それからは吊るし上げもなくなった。二十二年も半ば過ぎになると、作業ノルマ百%を超すと、ルーブルで賃金が支給されるようになり、ときには映画会なども行われるようになった。

そのころ、万国赤十字郵便で出した親友より返事が来たが、うれしさと感激いっぱい生き生き力が出てきた。二十三年六月ころ、突如荷物をまとめ出発準備せよ、「ダモイ」だと言われ、勇躍準備にかかる。「さよなら!! ジンブルカ」。いろいろな思いを抱きつつ車上の人となり、チタに着く。

たしか第三分所だったと思う。ここでの生活の思い出は余りない。一カ月足らずだったようで、七月ごろにクラスノヤルスクという所の収容所に送られた。もう当初からの仲間はだれもない。ここでの作業は草刈りで、足首まで水に浸り魔法使いの持つような大きな草刈鎌で草を刈るのである。労力の割にノルマは上がらず苦労した。

八月に入り、十五名編制で十五キロほど離れた山の

方へ移動し、天幕生活をしながら五、六名ほどは丸太小屋づくり、一人は炊事、洗濯、一人は馬の世話、残りは山に入り、木を切り、皮をはぎ、裸丸太をつくる作業で、手ごろな木を見つけて切るので、今までの伐採のように一カ所でなく、二人一組で山の中に点在しながらの作業でサボるにも都合よく、楽しいものだった。週に一度、ソ連の民間人が作業点検に来るが、我々に任せ切りで、私たちの作業報告をそのまま記入し帰っていくので、随分ゴマ化した。山の中でコケモモの実を取り持ち帰ると、炊事係は菓子職人だったので、ジャガイモを使い見た目には生菓子ソックリの菓子をつくってくれる。ドラム缶の風呂に毎日入ることができ、丸太小屋の宿舎ができてからは、黒パンを醗酵させ、松葉を入れて「ドロジ」、コケモモの実で果実酒のごときものをつくり、風呂上がりのひととき、楽しく過ごしたもので、抑留中唯一、日本人同士で心を一にして生活できた楽しい思い出である。時にはソ連人が立ち寄ることもあり、宿舎に寝かせたときもある。

楽しい生活も十月いっぱいまでチタ第一分所へ移された。山の作業の結果がバレたらと心配の毎日だった。

作業は一日三交代で、チタ市内の排水溝掘りと側溝づくりである。私は夜中の作業班に属し、ガムシヤラに頑張り、毎朝収容所でハラシヨラポータとして名前が張り出された。作業監督は日本人のアクチーブである。十一月の十日ごろだと思うが、夜中の作業を終えて収容所の門を出ると、「今から名前を呼ばれた者はこちらに並ぶように」と言われ、私も呼ばれて列外に出て並ぶ。明朝、数百人の仲間とともに貨車に乗せられ、チタより一路東へ向かって出発、車中でも何事もなく、駅と駅の間長さを感じつつ、改めてシベリヤの広大さが感じられる旅行であった。

ナホトカに着く。いまだ未完成の港町との印象が強かった。日本人の抑留者が作業しているのが見える。海岸に並ぶ収容所に入れられた。ナホトカの滞在は、五、六日ぐらいたったろうか？いよいよ帰国の日がやってきた。何も持たない抑留者の帰国に際し、税関検査があったのは驚きである。通関後、岸壁に整列した

のは十一月二十五日朝で、夢にまで見た船腹の日の丸、ローマ字でSHINYOMARU、その上部に「信洋丸」と漢字で書かれた日本の貨物船が横づけにされている。この場で逆戻りさせられた者もあつたとか？ソ連の政治局員が姓名を呼び上げ、一人ずつ力強くタラップを上っていく。何人目かに私も呼ばれ、タラップを上り、甲板に足をかけ、確実に自分の足で踏み、日本人の船員を目にし、「御苦労様でした」と言われたとき、ああ、これで日本に帰れる。思えば苦しくつらい、そして毎日が死と隣り合わせの日々から解放される、と。

このうれしさと安堵でいっぱいだった。

総勢二千名船倉に入り、四角い入り口から空を仰ぐ。何はともあれ、早く船が動いてくれと願う。やがて船は動き出し、防波堤の中を徐々にスピードを上げていく。内港より外港へ、船内ではアクチーブ連中がアジリ出した。船内は呼応する者、アジる者、労働歌を歌い革命歌の合唱に合わせて踊り出す者、それは解放感にあふれた熱意ですごいさまだだったが、船が外海

に出ると台風の影響でものすごい時化となり、いつの間にか船内は静かになり、何人かの者がゲロするようになり、昼食、夕食時に食事する者は数十人となった。

翌朝、昭和二十三年十一月二十六日、舞鶴港へ着く。甲板から見る日本の景色の美しさ。ああ、これが日本だ!!箱庭のような美しさ、ただただ感動と感激で、何と表現してよいものか!!長い栈橋を渡り、故国の土を踏む瞬間、みんな足を高く上げ、力強く踏みしめる、と同時に目から涙を流している。

翌日から米軍の聞き取り調査がなされ、私はさらに小室と呼ばれ、顔実験までさせられた。英語、ロシア語、日本語、混ぜ合わせての取り調べて、随分と念入りにやられ、今でも日系二世軍人の取調べは不快な思い出である。

十一月三十日、夜、故郷の家に帰りついた。久しぶりで一家そろったが、父は事業に失敗し、借金に追われ大変な状況であった。私も早速働きたいと思ったが、就職難時代。その上シベリア復員軍人となれば尚更難しかった。幸い義父の口聞きで教壇に就くことになり、

その後は順調に勤め、現在退職後十二年目を過ごしているが、もつたないほどの良い子に恵まれ、平穩な日々を過ごしている。

それにつけても、酷寒のシベリアで望郷の望み果たせず、万斛の涙をのみ、命を亡くし、今もなおシベリアに眠る抑留者を思うとき、今なお、つらく暗澹たる気持ちを試うことはできない。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年一月十一日（七十歳）

昭和十八・四・一 東洋語学専門学校（現熊本商科大

学）入学

十九・十・十五 西部一六部隊入隊、直ちにハイ

ラルの満州第三六二部隊大隊砲隊に編入される

二十・八・九 ソ軍侵攻 興安嶺へ転進

二十・八・十五 終戦 興安嶺にて武装解除

二十・十・下 入ソ 千五百名で作業大隊編制、

大隊長小野少佐

二十・十一・上 チタの山の中ナリーム收容所千名、近くのジンブルカ收容所五百名に分かれる。ジンブルカは河のへりで冬は伐採、夏は流木をしていた。白井氏はジンブルカ組であった。

最初の冬は、ソ連兵の糧秣の横流しで（後日司令部の調べで判明した）食糧事情が極度に悪く、約三割の人が死亡した。

作業は、周囲の山を切り尽くして、後では五キロも遠くまで出かけるようになった。

昭和二十三・十一・二十 ようやく信洋丸にて帰国

復員後、保健所、税務署、農林技官、警察等の公務を受験したがすべて不採用となる。

昭和二十八・七・一 小学校教員に採用され、以後教職に精励する。

昭和五十九・三・三十一 三十有余年の教職の任務を

終え、退職

本人が常に語っているように、よき妻子に恵まれ、悠々自適の老後のつもりであったが、世間が許さず、教職会の副会長として多忙な傍ら、町内会長等を経て、

警察の防犯推進委員等々老骨に鞭打ちながら、今ではできる限り社会に貢献し、社会にお返しをして、併せてシベリアの同志の死をむだにせぬようにと頑張っている毎日のようであります。

（熊本県 高瀬 潤吉）

シベリア抑留者の手記

千葉県 奈良 光雄
（旧姓 印藤 三夫）

武装解除のころ

阿城重砲兵連隊第五大隊に属していた私たちの部隊は、本来東部ソ満国境にあつて敵トーチカを破壊し、友軍の敵陣突破を開くことを任務として①と称し、口徑三十センチの長榴弾砲を有し東部国境に駐留していたが、昭和二十年ころ戦争の状況も悪くなり、逆に敵戦車の侵入を防ぐ任務を持って牡丹江東方の鏡泊湖付近に展開してソ連軍との開戦を迎えることになった。